左義長行事

酒津のトンドウ

寒風をついて…

国指定無形民俗文化財

酒津まちづくり協議会

●トンドウを造る

トンドウの準備であるが、松、竹の伐出しと飾り注連縄（しめなわ）作りから始まる。松の伐り出しは正月5日に行う。以前は、12月13日の事始めの日から始めたという、現在は10月頃から始めている。

この飾りは、ミノグミで、長さは200メートルにもなるという。

土曜日の午前8時頃からトンドウ作りが始まる。

中心に立てる4～5メートルの松1本とその周りに立てる孟宗竹12本を伐ってくる。

12本の竹は1年12ヶ月を意味し、閏年は13本にする。

中心に1本の松を立て、それに12本の竹を斜めに立てかけて円錐形の荒組を作る。

この先端に鯛と扇を取り付ける。

そして、この荒組にミノグミの飾り注連縄を何重にも巻きつけていく。

こうして、トンドウが出来上がると、各家々は正月飾りを持ってきて、ミノグミに差し込んだり、結びつけたりする。

完　成

● 行事の主役

この行事の主役を務めるのは、男の子に限られており、頭送り（小学校6年生）、一番頭（同5年生）、二番頭（同4年生）、三番頭（同3年生）、四番頭(同2年生)、五番頭（同1年生）というふうに組織されている。
この中で指導的な役割を果たすのは一番頭であり、頭送りは顧問格として助言を与える。

● 行事の起源

この行事がいつ頃から始まったのかわかりませんが、古老の言い伝えなどから、少なくとも江戸時代の終わり頃には行われていたと考えられます。

● 行事の変遷

トンドウ行事は本来、男の子供たちだけで執り行い、大人に頼むのはトンドウを立てる時ぐらいだったという。
現在は、酒津全体で1箇のトンドウを造っているが、昭和30年代頃までは、東条、大中条、小中条、西条、樽谷の5地区がそれぞれにトンドウを作っていた。
現在は、15日に最も近い土・日曜日に行われるようになった。

酒津のトンドウ

● 行事の変遷

酒津は、戸数約180戸、以前は純然たる漁村であった。
そして、現在のように国道9号線をはじめ陸上交通が整備されるまでは、北に日本海を望み背後の三方を山に囲まれた隠れ里とも言える陸の孤島であった。
こうした自然環境が、近隣に例を見ないトンドウ行事を温存しえた理由の一つであろう。

●トンドウ行事 1日目

土曜日の午後2時頃になると、一番頭(かしら)の率いる子ども達は海岸に出て、モクと呼ばれる海草(ボンブワラ)を拾う。 そして全員パンツ1枚の姿で、モクに海草をつけてぐるぐると振り回しながら、自らの体を清め、「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声も勇ましくトンドウの回りを3周する。そして 、数組に分かれて、頼まれた家々の玄関先に行って、「祓(はら)いたまえ、清めたまえ」と口々に唱え清めて廻る。これを「垢離 (こり)をとる」という。垢離を何回となく繰り返し終えた子供たちは、風呂に入って体を温めたあと、トンドウ宿(現在は自治会館、以前はそれぞれの5地区の一番頭の家が宿となった。) に集まってくる。そこでは、祝儀が分配され、赤飯やカレーなどのご馳走(ちそう)をいただく。

●トンドウ行事 2日目

日曜日午前1時になると、子供たち全員でトンドウの前触れをして廻る。「一番オタキだでぇー、トンド、トンドー」と威勢よく叫びながら廻る。この前触れはさらに午前2時(二番オタキ)午前3時(三番オタキ) と行われ、4時半には「トンドウに火を入れるでぇー」と触れて廻る。(現在はサイレンで知らせる) 午前5時(以前は4時)区長が火を入れる(以前は一番頭の役目だった。)と、暗い夜空を焦がして大きな火柱が上がる。以前はこの火が遠く隠岐の島からも見えたという。トンドウの火に書初めの紙を燃やし、高く舞い上がれば字がうまくなるとか、この火で供え餅を焼いて食べると一年中病気をしないなどといわれている。

平成3年1月31日 鳥取県指定無形民俗文化財に指定

酒津まちづくり協議会　鳥取県鳥取市気高町酒津359-1　TEL.0857-82-2990